

二〇〇三年度国文学会彙報

二〇〇三年度国文学会活動状況

△新入生歓迎会▽ 学生部会主催

二〇〇三年四月七日(月) 京田辺校地紫苑館食堂

△国文学会総会・研究発表会▽

二〇〇三年六月一日(日) 至誠館3F会議室

- ・総会
- ・研究発表会

民俗学の展開と『文芸文化』

柳川朋美(本学博士課程前期課程修了)

近世小説と芸能——『御前義経記』の場合——

神谷勝広(本学助教授)

源氏絵研究の問題点

岩坪 健(本学教授)

△国文学会臨時総会・研究発表会・講演会▽

二〇〇三年二月九日(日) 寧静館5F会議室

- ・臨時総会
- ・研究発表会

『義経記』の再構成

西村知子(本学嘱託講師)

俳句の近代化——明治二十年代の正岡子規を中心に——

青木亮人(本学博士課程前期課程)

「実地探検」とは何であつたか

——江見水蔭の探検記を中心に——

熊谷昭宏(本学博士課程後期課程)

- ・講演会

書くことと私

眉村卓(作家)

△講演会▽ 学生部会主催

二〇〇三年一月二六日(水) 今出川校地寧静館三二番教室

- ・ヨーロッパ企画について

——ヨーロッパ企画のこれまでを振り返るショート・コント

公演—— 上田 誠(ヨーロッパ企画代表)

△同志社国文学▽

第五九号 二〇〇三年二月二五日発行

収載論文四編

第六〇号 二〇〇四年三月二〇日発行

収載論文十一編

△国文学会会報▽ 第三〇号 二〇〇四年三月二〇日発行

二〇〇三年度修士論文題目

『古事記』における「反乱物語」の意義

本 山 裕 子

『今昔物語集』蘇生譚にみえる類型について

——本朝部を中心に——

益満まを

『平家物語』における建礼門院の語られ方

日本派の蕪村受容

——明治三〇年前前後の正岡子規を中心に——

青木亮人

大正初期の芥川の小説に対する戯曲制作の意義

久世貴章

夢野久作「ドグラ・マグラ」論

——「自我忘却の無間地獄」について——

三上雅弘

観智院本『三宝絵』における用字意識

略語について

窪田絵理奈

——朝日新聞の見出しにおける略語の考察を中心に——

李昕

二〇〇三年度卒業論文題目

『紀女郎怨恨歌三首』の解釈

原良太

『万葉集』卷三・一二二六、一二七歌

——石川女郎と大伴田主の間答の意味するもの——

重政陽子

ウケヒとは何か

城野鈴巳

日向三代における出生

——出生表現「産」「生」を視点として——

恒藤彩

『源氏物語』後期挿入への読みを探る

——末摘花を中心に——

山田将行

源氏物語における末摘花の人物造型について

法然上人伝についての一考察

——『知恩講私記』を中心として——

勝部隆満

『今昔物語集』卷二十七 二十二考

——そのカニバリズム的側面が伝えるもの——

柳田哲

『和泉式部日記』の叙述と構成

『今昔物語集』より「月の兎」考

辻本麻起子

『信貴山縁起絵巻』考

——詞と絵画の比較を通して——

長谷川典子

『蜻蛉日記』の「心の鬼」

『落窪物語』における復讐と笑い

喜多良子

『今昔物語集』卷二十第三における作品意図

『源氏物語』六条院世界の光と影

菅野清香

『源氏物語』における花散里

御伽草子『木幡狐』の本質

福岡真菜

『大鏡』の主題

——道長の五つの逸話をめぐって——

吉信華世

『今昔物語集』「荒三位」考

——『小石記』の記事との比較をめぐって——

中村恭子

中島彩樹

松谷彰子

前田文一

横井慎介

『源氏物語』須磨の巻の方法

——和歌をめぐる——

『源氏物語』における空蟬の意義

『源氏物語』の女房の意義

仏教説話の他界観 魂と体

——『今昔物語集』巻二十第十八話を中心に——

『落窪物語』「継子いじめ」考

『日本霊異記』第三〇話における「作者景戒」の意図

御伽草子「一寸法師」考

『今昔物語集』巻一一第三六話「修行僧明連始建信貴山語」考

——信貴山寺創建・再興伝承の考察を中心として——

『今昔物語集』「葉しべ長者」考

『今昔物語集』「源博雅朝臣行会坂言許語」考

『源氏物語』における紫の上の死の意義

『宇治拾遺物語』第一一九話の特質

道成寺説話の展開

——謡曲「道成寺」における後日談形成の意義——

鈴木真一

濱口香織

古久保早紀

丹羽裕美子

山口由華子

内田麻衣子

奥山亜希子

杉本征司

増山孝之

白木聡

永田祐子

宗本雄太

橋本佳奈

御伽草子「一寸法師」の背景

——一寸法師の正体——

謡曲「敦盛」における敦盛と青葉の笛の意義

宗盛の果たす役割

——覚一本平家物語における——

覚一本平家物語における鱸説話の考察

——「鱸」は何故飛び込んできたのか——

源義経・梶原景時の人物像

——平家物語・吾妻鏡に見る二人の生き様——

『とはずがたり』における二条と西行

『太平記』における人物造形

——日野資朝・日野俊基をめぐる——

『信長公記』『武功夜話』に見られる信長の戦術

説話伝承と女性

——義仲説話の伝承者「巴御前」の基盤——

徒然草における「老い」について

増賀上人説話・奇行の考察

——その実像と虚像——

浦島伝説と変容

——善行に対する報いの謎——

雨月物語「吉備津の釜」考

——秋成の描き出す人間像とその背景につ

堀井美里

角谷美喜代

河西哲郎

村井美帆子

辻村智

脇山紗弥子

山本絵里子

龍見剛央

小宮山智子

小野仰

米田好次

木村恭子

竹村恵

竹村恵

いて——

『鍵の権三重帷子』論

——「錯誤」の視点より——

堀部 由加里

『雨月物語』における女性たちと「家」のあり方
表現から探る口上の面白さ

前田 樹里

——見世物・大道芸・大道物売りの口上を
中心に——

奥田 友里

歌舞伎における赤の持つ意味

——三姫との関係を中心に——

大石 有香

「縁切り物」と「殺し」

大田 美佳

『忠臣水滸伝』の人物像を探る

——第七回「一力茶屋の段」について——

佐藤 優知

出世した端役法界坊

——何故主役と成り得たか——

高瀬 静香

石川雅望の描いた『しみのすみか物語』

——盗人と医師の対立に注目して——

竹本 茜

草双紙の享受対象について

近世文学作品における能の影響

——謡曲『融』を題材にした作品を中心に——

山口 侑子

見世物師及び大道芸人を通して見た化政期江

戸歌舞伎について

——生世話・変化舞踊を中心に——

牲川 みほ

三遊亭円朝の怪談噺の中の敵討ちについて

一戸 俊亮

『お伽草紙』論

——「性格の悲喜劇」に見る太宰治の思い——

中澤 哲也

『ネオ人間失格論』

『鏡子の家』

——青年たちの幻滅——

桂 由夏子

井上靖『補陀落渡海記』論

——歴史的事実と小説の主題の関係——

山田 哲久

星新一『未来イソップ』研究

『氷点』にみる三浦綾子の思い

金沢 泰司

——二つの構成要素とテーマとの関連性から——

津田 愛子

三浦綾子とキリスト教

『海と毒薬』論

北村 政記

『千年の愉楽』における中上健次のねらい

——「路地」を基点として——

山根 安由美

『1973年のピンボール』

——双子の姉妹の存在意義——

入部 俊紘

村上春樹『ノルウェイの森』について

——「二極構造」と「喪失」の観点を通して——

伊藤 和也

村上春樹の変化

——『レキシントンの幽霊』から——

鈴木 亮佑

竹内 優佳

『スポーツニクの恋人』論

——フィクションライターとしての役目——

堀池 秋香

『海辺のカフカ』に見る家族像

浅野 福太郎

村上春樹作品における音楽の文学的見地

大杉 加奈

柳美里『石に泳ぐ魚』

——里花・柿の木の男・ラストシーンにおける「事実」と「虚構」について——

水谷 公彦

澁澤龍彦『高丘親王航海記』論

——合わせ鏡の中のユートピア——

谷川 翼

有島武郎「一房の葡萄」の主題について

——色彩印象と「甘美さ」から——

平野 紗都子

小説家芥川龍之介と童話「蜘蛛の糸」

「歯車」に見る「僕」と芥川の不安

池田 佳世

佐藤春夫の歴史小説の方法を論ずる

「土神と狐」論

兼氏 貴史

——土神の嫉妬と狐の嘘——

笹 浩樹

川端康成「水月」論

——底にある異常性——

岡本 茉莉

横光利一論

——横光利一の目指したリアリズム——

永井 孝尚

江戸川乱歩と同性愛

——『孤島の鬼』論——

川本 沙織

中村 友紀

夢野久作「氷の涯」論

——「一人称」で「自分をこえていく」文学——

川戸 雄介

夢野久作『ドグラ・マグラ』論

——「時間意識」と「自己同一性意識」について——

信太 弦

梶井基次郎論

——各時期の特質とその変遷——

中村 州吾

『金魚繚乱』の中に見られる岡本かの子のナルシズム・空の空想・フェミニズム

——「色ざんげ」論——

妹尾 裕子

——恋愛の鍵語と女の生について——

藤本 さゆり

『細雪』にみる谷崎潤一郎の女性像と美意識

二項対立の視点からみた「夜長姫と耳男」論

高多 祥司

夏目漱『夢十夜』

——イニシアチブをとる女——

中村 瑠美子

遠藤周作『深い河』にみる母胎回帰

——遠藤作品の母胎とは何か——

千葉 真弓

芥川龍之介『羅生門』

——『羅生門』の世界観と「下人」の存在——

今田 慶一郎

『紫苑物語』について

——忘れな草への誓い——

堅田 陽三

『文字禍』を恐れる文化人

——昭和10年代の読者の視点から——

松島法子

商品・視線・消費・抵抗

——池谷信三郎『橋』とデパート——

大本幸恵

『虞美人草』アールヌーヴォーが示すもの

乱歩のからくり仕掛け

——『押絵と旅する男』より——

佐野絵理

文壇のプリンスから皇太子へ

——島田雅彦論——

佐藤雅也

「他伝」的「自伝」小説はどのように成立し

得たか

——三島由紀夫『金閣寺』論——

澤田朋子

インドの側からみた『深い河』

向田邦子『思い出ランプ』論

——仕掛けを使って描かれた人間像——

為田直子

二一世紀に読む『海と毒薬』

村上龍『五分後の世界』

——『五分後の世界』にみる言語観——

福井健太

「わたしが・棄てた・女」にみるミツの自己

犠牲

井上阿美子

倉橋由美子『蠅たち』における設定とズレ

『コックサッカーブルース』論

岸上真希

「刺青」における虚構性とリアリテイー

井上ひさし『偽原始人』における虚構性とリアリテイー

——アリティイ——

——「第三次主婦戦争」と「教育ママ」を

視点に据えて——

宮井瞳

宮本輝『泥の河』研究

『魍魎の匣』

——空虚と幸福——

内藤洋介

村上春樹『ノルウェイの森』論

——マイノリティの描出を基軸として——

小川哲平

戯作気質

——『手鎖心中』にみる江戸文芸の手法——

岡田直子

菊池寛『藤十郎の恋』

——幻だった没原稿『坂田藤十郎の恋』の謎について——

島端優子

かつて子どもだった私たちへ

——赤い蠟燭と人魚をめぐって——

田村朋美

アイデンティティの確立と家族・関係・役割

——『ぼくは勉強ができない』——

吉川淳司

『都市伝説』の要素から見る大江健三郎の初期短編

敗兵の向かう先

——『野火』における復活と再生——

吉川謙介

河野麻衣

『個人的な体験』における新しい人間の位相

——二重の表象と鳥——

脇本賢

村上龍の新しさ

——『限りなく透明に近いブルー』が文学

水野いずみ

賞を受賞した背景——

宮沢賢治童話のオノマトペについて

榎麻美

広告における意外性というレトリックについて

藤原晶子

神戸方言「ヨッタ」・大阪方言「ヨッタ」

の境界線を求めて

平井賢

大分方言における可能表現についての一考察

村上和也

競走馬の名前の命名と語構成

——2歳馬の調査結果——

酒井優

国語教育と「表現よみ」

——「読むこと」・「聞くこと」——

下園晴紀

かな字形の差異についての考察

——手書き文字・パソコン用フォントを中

田中亚実

心——

行為要求表現における待遇のありかた

——『醒睡笑』巻之一・巻之二の会話文よ

浅倉薫

り——

書き言葉の「(の)ではないか」について

廣川雅子

日本語と朝鮮語との語種の対照的研究

——『朝鮮語辞典』より——

重森栄一

『落窪物語』の滑稽

——象徴詞の役割を中心に——

近藤絵美

日本人女性名の構成法

——形態的特質と意味をめぐって——

岡本弥子

大学生における方言意識について

——出身地域による方言意識と使い分け意

辛泰一

識の差異について——

場面による方言と標準語の使い分けについて

——京都で学生生活を送る大学生の使い分

山田真由

け意識——

若年層における京都方言の使用の変化について

絵本の文の性質

大橋美里

——対象年齢の別を手掛かりにして——

テレビ番組名におけるアピールの方法

——表記と語種をめぐって——

松本祐一郎

流行語「癒し」についての意味・用法を分析する

山口美紀

山本昌恵